

(27)

氏名(生年月日)	ナカ 中	ジマ 島	キヨ 清	タカ 隆
本 籍				
学位の種類	医学博士			
学位授与の番号	乙第779号			
学位授与の日付	昭和61年10月17日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)			
学位論文題目	食道離断術後の食道静脈瘤に対するプロプラノロールの効果			
論文審査委員	(主査) 教授 織畑 秀夫			
	(副査) 教授 羽生富士夫, 教授 杉野 信博			

論 文 内 容 の 要 旨

目的

食道静脈瘤には直達手術として食道静脈離断が行なわれるが、高門脈圧が改善されないため、静脈瘤再発や再出血をある程度避けることはできない。最近 Le-brec らは、プロプラノロール経口投与を継続することにより門脈圧を下げ、食道静脈瘤の再出血を防止し得たと報告している。また Viallet らは、補正肝静脈圧が12mmHg 以下ならば食道静脈瘤よりの出血の危険性は殆んどないと報告している。著者はこの2点に着目して、食道離断術後患者に対する食道静脈瘤再発予防のためのプロプラノロール持続投与の効果について検討した。

対象および方法

対象は1981年9月より1985年1月までの間に当外科においてEEAによる開腹食道離断術を施行した21例である。初回検査は、閉塞肝静脈圧、肝静脈圧、心拍出量、肝血流量などをスワンガンツ・カテーテルを用いて測定し、プロプラノロール40mg投与1時間後に再度同一項目を測定した。その結果、補正肝静脈圧(閉塞肝静脈圧と肝静脈圧の差)が12mmHg以下に下降しうるプロプラノロールの1日投与量(20~60mg)を個々の症例に設定し連日投与した。投与1カ月後、3カ月後、6カ月後に補正肝静脈圧を測定しプロプラノロール投与量を補正した。プロプラノロール投与後の食道静脈瘤再発の有無や残存静脈瘤の変化に対する臨床判定は内視鏡検査によっておこなわれた。

結果

1. 補正肝静脈圧は、プロプラノロール投与前14.33mmHg、投与1時間後10.81mmHg、1カ月後9.71mmHg、3カ月後9.93mmHg、6カ月後10.36mmHgと有意に低下し、プロプラノロール20~60mg/日の内服により、補正肝静脈圧を12mmHg以下に低下させ維持することができた。

2. 副作用は、プロプラノロール投与の継続により軽度の脱力感を訴える症例が4例あった。4例ともプロプラノロール減量により自覚症状は消失し、かつ補正肝静脈圧は12mmHg以下に維持されていた。またその他の副作用は認めなかった。

3. 食道静脈瘤の内視鏡的变化についてみると、プロプラノロール投与開始時、術後静脈瘤が消失したまま不変のものが7例あった。残り14例は術後残存あるいは再発例であった。プロプラノロール投与後改善をみたものが3例あり、残りの18例は不変で、増悪例はなくまた再出血例もなかった。

結論

プロプラノロールの持続的経口投与により、高門脈圧における補正肝静脈圧を下げて維持することが可能であり、食道静脈瘤の離断術後の再発の予防に役立つものであることを明らかにした。

論文審査の要旨

食道静脈瘤の治療として食道離断術が行なわれているが、高門脈圧が改善されないために、静脈瘤の再発および再出血の危険がある。

そこで著者は、本論文において門脈圧を下げる作用のあるプロプラノロールに着目し、食道静脈流で食道離断術を施行した21症例に対し、術後長期のプロプラノロール持続的経口投与を工夫し、実施した結果、補正肝静脈圧を下げることができ、静脈瘤の再発および再出血を予防する効果のあることを明らかにしたものである。

本論文は学術上価値あるものと認める。

主論文公表誌

食道離断術後の食道静脈瘤に対するプロプラノロールの効果

東京女子医科大学雑誌 第56巻 第8号
631～646頁（昭和61年8月25日発行）

副論文公表誌

- | | |
|--|--|
| <p>1) 急性腹症に対する腹腔鏡の意義
救急医学 8 (7) 853～857 (1984)</p> <p>2) 機械的イレウスに対する腹腔鏡の意義
臨床外科 39 (11) 1599～1604 (1984)</p> <p>3) 腹部外傷に対する腹腔鏡の意義
日災医学会誌 33 (1) 40～45 (1985)</p> | <p>4) 急性腹症に対する腹腔鏡診断のポイントとなる所見
腹腔鏡 4 52～54 (1985)</p> <p>5) 食道離断術後患者に対するプロプラノロール持続投与の意義
日外会誌 86 (8) 973 (1985)</p> <p>6) 食道静脈瘤出血に対する食道離断術後の薬物療法と内視鏡変化について
Prog Dig Endosc 27 (12) 56～61 (1985)</p> <p>7) 虫垂粘液嚢腫による腸重積症の1例
日臨外医学会誌 47 (3) 372～378 (1986)</p> |
|--|--|